

本多弘之

honda hiroyuki

宗教心と根本言

2

いわゆる宗教心に対して、仏教では菩提を
求める心を通して、人間の自覚的救済を呼び
かける。無明むみょうに覆われていることから脱却し
て、智慧による明るみを獲得せよと教える。
それに呼応して衆生が発起する意欲を、大乘
の仏道は「菩提心ぼだいしん」という。仏教における宗
教心とは、菩提心であるということになる。
その菩提心を磨いて、自己の意識を無明から
解き放つて、透明な明るい意識になる方向を

求めて生きる存在を、菩提薩埵ぼだいざつた（略して菩
薩）という。したがって菩薩とは基本的に、
自力の努力を生活態度とする存在であるとい
うことになる。この人間存在を求道者きうどうしやともい
う。道とは、菩提の翻訳語でもあるからであ
る。
この道は、自分の努力生活によって自己の
無明を取り去るまで歩むのであり、菩提心が
成就して菩提（さとり）を開けば、仏陀ぶつたに成

るとされるのである。この仏道一般を自力聖
道門じりきどうもんと呼ぶのは、この歩みがどこまでも自己
の内にこの道を徹底しうる能力があることを
信じて、自分で無明を払おうとするからであ
る。この道を清沢満之きよさわみんしは、自力門であるとい
うのである。
それに対して、自己の愚かさや罪業の深さ
に悩む場合には、この道が自分にとって是不
可能であるということになる。この気づきが



仏道の伝統の中から、本願の教えを求めて、浄土の経典を生み出してきたのである。この本願力を仏道成就の縁として、一切衆生に呼びかけることを、清沢は他力門と呼ぶ。

この自力・他力の二種の門を並行的にいずれによっても成就可能であるごとくに建てているのが、『宗教哲学骸骨』の思索である。

ところが、『他力門哲学骸骨試稿』になると、明らかに清沢自身が自己の求道の展開において、他力門を選び取っている節がある。それは、自己が触れた人生上の因縁において、親鸞の教えを依り処とする宗門「真宗大谷派」に深い関係をもったからであるともいえる。彼の求道の資質が明らかに自力門に傾向していることからして、それは仮の妥協的決断であったということなのだろうか。そうではあるまい。彼の厳しい思索的内省の生活には、必ずや自己の有限性の自覚が起こったのであるうし、他力門を自己の求道における決定的な道として選び取られたのだと思う。

明治三十一（一八九七）年十月二十三日の日記（『臘扇記』）に記された表白には、「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」と記述し、それに続いて、「自己とは他なし」と始まる有名な表白が記されている。「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾にこの境遇に落在せる者、すなわちこれなり」と。この結論のような記述は、多

分、これに先立って自力・他力のいずれかを選り取りざるをえない信念の展開があったからだといふべきであろう。

この表白には、自己自身の自覚的な存在認識こそが、宗教心のありかであるという清沢の主張がある。いうまでもなく、「自己とは何ぞや」とは、ソクラテス（Socrates）紀元前四六九頃〜紀元前三九九）に由来する哲学の根本テーマでもある。このテーマを清沢は人生の根本的問題であるとして、宗教心もこのテーマの追求であると見ているということである。しかも、この自己を「他力掌中の自己」として、自己発見すること、この自己認識の開発こそが、宗教心の歩みの目的であるということになる。

振り返って、仏陀の涅槃説法にあつたとき、**「自灯明、法灯明」**を想い起こしてみよう。釈迦如来を師匠とする仏弟子たちが、師の入涅槃にあつて、不安と悲しみに打ち拉がれていたとき、如来は静かに、「自らを灯明とし、法を灯明として歩め」と励ましたと伝えられている。弟子たちの自分自身にとつての他である人間釈迦に執着するのではなく、自分たち自身において、法に生きる自己を見出して生きよというのである。この「自ら」によることとそれを自覚させる「道理」（法）とによることとは、清沢が提示する「自己とは何ぞや」という根本的問題に深

く関わっている事柄であろうと思う。そして、その自己を包む「法」を、清沢は「絶対無限の妙用」であると示したのである。

清沢のいう絶対無限の妙用とは、『無量寿経』における「阿弥陀仏」の力動的展開を表そうとする表現であると思う。親鸞は、この「絶対無限の妙用」を「如来の大悲回向」というのである。一切の衆生の苦悩を観察して、「回向を首として大悲心を成就する」と、『浄土論』で天親菩薩が表現したのを、親鸞は『無量寿経』の願力成就の思想に結びつけて、阿弥陀如来の大悲が本願を成就するために、衆生に向かつて「回向成就」するのだと了解した。これがいわゆる「他力の回向」である。

この如来回向を信受するとは、大乘仏道の成就を、無限なる大悲自身が衆生のうえに願いをかけて、その悲願を成就せずにはおかないと誓い、その願を成就するべくはたらき続けていると信するのである。ここにきて、宗教学の体は、願力のはたらき（絶対無限の妙用）を信すること一つに帰せられる。清沢が「我、かくのごとく如来を信ず」（『我が信念』）という題で人生を結んでいることは、他力門の中心が自己の信念の獲得にあることを示しているのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）